梅兒譽美

二編 上

特
へ 遠13
839
4

特
へ遠13
門
839
巻 2

明治三六年
十月十八日
購求

春色梅暦

子細ありて顔で息子を禁制親人
も功徳池畔内より雪湧出るものあるべし。
猪勝の[illegible]数珠、ひろ[illegible]母親の菩提
樹の二枝より生ずるをば。さ[illegible]ぬ[illegible]
ざん男い二世の岩田[illegible]
[illegible]。兎角出苗[illegible]
[illegible]の姫[illegible]達の[illegible]

異ふものゝ色情の草紙より非しきものゝ何に
有生ざるん。世の河の書肆の米箱
をうめたるを。是将て小説家の
戯作の種蒔万ようよりきて。今茲
開ふ妖梅暦を為永大人の吉書始よ
して。書方が金神の金得利を天ぢん
得ふる家の福。さつ年を広まの新

板。嗚呼趣向は新しきて室咲花
梅も遂て及ざる。変生女子の新工夫ハ。
青漬の梅花を見るに過ちなくの延
喜吉慶恵方に向ふく出方題て。
阿房孔支を存めるを而已

九返舎主人戯述

蓬莱の
蓬莱の
蓬莱の

婦多川の米八

○抜きも
流行よ
洗ひく言君
書画の花押か
くく風流の
雅莚あ招く是一中是閑を
あく〜ものきとく〜と一の彩文
白ぬ白ぬ

○傾城は賢天ノ者此柳稿
堅は偽もあく〜ねたく〜ふこ種ぞ
ハきとく内全盛

唐琴至内
此米

再出
竹
蝶吉

作者
女髪結
小梅の於由

春色梅兒譽美卷の四

江戸　狂訓亭主人作

第七齣

さても丹次郎は二階より下りかゝる段階を登る梅次と米八にぎりめしと後を振向バうとのき顔よ蒔さ沢さん

この眼元嬉ふくむ口長ぐうらゝ米八もそ是と人さうよう

角田さ三ろ〳〵ぢ我ぢ〳〵ー　ぢ　「丹さん待くち出と

いつこの仁帰りそうろうくおいでゴトいひうぐうお出仁向仁

「ヲヤお善さんまたこれお久しぶりの極へこいそうに美くしく
おなりぐさそしてマアゆーの中に背丈も延さこそはそなたやア
モウ何処へ極にお出でも結とのひまぐ丹次郎の新妻お
ろりとアラ丹次郎ハ知れぬ色で「りんにちハとアラ極へうち
たきくこのう今甚だ遠くこそくうちとひご
「ハ」アもくこもあるこもい極へおもさん男とふこものを
どうもあるこれるやうでもこれにまくうこいのんざのう梅に
さんトすこし丹次郎にあてる「そりやそうざけまどうん

でも女の意魂次第さ時方ぐ惚りやア他もあまるうこ田
御成するとうこるいよ○おもハさぐ姫さまに表向をつくろう
愛相のあくねば徇よおのこと面に出くやこまくく物もい
いどにありけるぐ表ぐく知成知るり「米八さん堪忍かーよ
私ハ久しく遠方の人にあること表ぐくこうこのか
いまこのいくツイご表ぐく屋ごヨトこうこひ新する一言を嫌
むにちくこと性いぐぐのの世事ものべ「ハ堪忍の分
もいくこのハまそこそマア廊の方ハどうもーざエ「マア今に

ゑ〜〜〜〜出そうゞ者ハ者も角も梅ゝさんにたゝき酒でも

「ナニマアよのハ極く」「よりゝ〜ゑにモウあつ〜くゝハ極」「ハアそよ

ゝトいふうち跳へのうゑぎゝと酒飲てようたゝぐこゝよりた

ゝ〜〜〜盃のみきと〜〜ゑゞ〜」「そこ〜ゝゞやアおもさんハ今ゝでハ

ぞう〜〜てゝ出のゞく」「イヤモウとんゞこゝ〜さトおそゞ者の上

と先刻ゝ者ゝるとゝり今ゝ〜〜たゝ者ゝ〜米八も者の

毒にゝ者ゝ」「そこ〜ゝゞやアマアとんゞ苦労と者ゝめゝ極ゝ〜

物怪の者ゝ者ゝ鬼者ゝ者ゝどんゞゝ者ゝらゝ〜ゝ成するの成

ハそ者ゝ者ゝゝよりハ結ハゝトいひゝゞ〜米八法〜〜とかんゞ者ゝ

にけゝも者ゝを丹次者ゝゞゝひゝゞけゝとゝいひゝまゞけゝゞ者ゝの者ゝ

ゝ人者ゝすゞゝゝゝ

どうぞ「アイと敵とをる」「わんにも長うん久しぶりでお
見にかかりこんおてを我いつもぶーつけどぶる今ぐどやアま
とーも婦多りくどうやら那やう義者の数に為ること
いつも自惚らーいとちこーこひぐらうぐ実のことは極法きん
とたぐめとーてこん命が心易くーくおまぐーく押もおさ
まをまいい身のうくそまにつのいらやう若旦那そぐんぐの
ゆやーーあせまとーこーこのがヨとーもトーしぶりひきて「つい
おとこーこ若旦那と深くいひうーー身体よ自門てーさ

いにおよぐ後今でも「一番に居るのたうりお宮の意義よ
で。出く居ても知れたる夫婦中トまぐとあぐーこくいくもぐ
いろぐとうかーぐはりとこーえうそまいゆおまーこーぐ
まの。しぐーこのとぐくーこけ身我いまくーこうぐとのう行でくるの
けまーどマア若旦那のこそくにるる事ぐんくーぐおまん
もぐーこうこまぐよお今の指ふうーぐを遠方義志のまに
おおーうぐぐぐーまこんとも方のぐん人猫まぐこーーとト
たんぐんまの。まーこまーこまこーこ神ど意の意地「まこーこに

出信切ゐぢくみ〜完に居と藝者衆に二人が二人
お世話に成ちやうお寺の毒ごろ〜私もごうう若旦那の
手助けかあるやうにこまつちの言葉つけてトボケて来
八さげ〜こ〜ひ「ヲヤそうく人そ是ハ〜若旦那のお社会
ごトの江戸に丹波屋にもひ「アゝわんにあ事へたんにそうこの人
とゐ門く日を見て居こがゝ子若衆よふくりとしこ〜ゐ
あるうこ表にあそこへ越くお呉ゐよこ中のこの人私ぶ往来
に遠い〜そ〜モウ不用がごく〜苦労ごよそゐうきのこ今日

帰ると造作ないと戸棚から銭買って仕度をしてヨト行こうと後
の梅さの梅次八銭方かりまさぐく出「コウ米八さんゐんでる
おゐ内く梅く言ふ米付ぐまま人らしく、如何でもいとめくど
ぞうろうろく産がまらけるしどやア梅くう舟さんまるんアア
このお婚礼連れく先へお帰りか「さあうまのみ二人で宅と
出さのぐうく案じるとうるのうくまくはやそうそれどやア
米八おうア先へ行くく梅さんとありと「ハイさあうあ
いでこお帰んあまのおいさんまとはるにトやらしどがるを
大骨折りく言るの附とうりのやせんと思う言八わまさ
おの出るうくく駄言らしけまどあり形ぐど「ハイさ
ちうあうト梅次と米八へ一度にあのさ門しく二階戸
下る丹次郎もつぐのそ上り口へ行を米八をうろうろう
背中をひぐはり肩を毛をあげてあくく形ぐく元の
知ぬまうり「まやくお帰り丹次郎「モウいどやア梅へ
う第八小児ぐアかの。丹次郎へるぐうひ「丹「梅へ言ちぐ
ひぐ「てうあ門ちやア幸遠さトうとへく屋二楊枝ぐう

り拾ひ〳〵中喜うて「おもさうん迷子になつてゐるを
を知らまてゐるのでよ」「いてうげんまる藤次のひかト梅次と
何のうさ〳〵あのてこの〳〵行「いやまいのう」「
うんの浦も〳〵孫へわんかひい〳〵さうも藤次姫がをること
も孫へもあ〳〵マア不断の〳〵また仙今八孫へ丹ヤトかるると
まことに悪智ごとてえげんにゐねへか「そまでそこの」を
ちら〳〵いやうか丹さんぶ門てもきんざ〳〵もあの藤次は
ぶんやうれこもあるあいか「そうも思のけまどあちさん
ぶ子ぶ〳〵由断ハ〳〵孫へ「わきまるヨト猫ぶ来
ハ〳〵さ〳〵「サアたやく〳〵春を切わげ孫へかもらア今貝か
めへのお蔭で海ぶ裏に落てそらけ孫へ「わんさのハ嬉
悪ゐねへ面目ものぶるぜこんあに迷ハころう「モウ〳〵
もの〳〵ハ結ぬへ〳〵沢山ぶアトるハこりるひ「実に
色ぶ活業とのハ〳〵ヤア孫へぶるまま行ハこ活も
つぐ〳〵孫ても笑底やまるところ〳〵こまこぶ〳〵こけか
ゐるよ「ア代の工夫前方アるハこぶもうく〳〵まに

おとこ門さくるるのハこの道ごのゝト深くとゝハ梅ばちを
拭ひを米八ゞ擦へうける「ヨヤ何成するのゞ」「おめんゞ
まりのうけるゝようゞまゝ成さゝれることおもひ門てサ「ヨヤ
らやしい指べきるとハ来ゞ指うゝんゞ「来ゞ付さゝモウ
出うけあう「々モウ酒もいのト親宝成供の男にさせ
笠持まあゝ二人ハ行うゝとさゝやきゞゞ行ゝ
ある身とさゝとハ知ゝんいよさるくゝと喜ゝゝその美
しゝきう仇とゝり仇さまきゝ苦労ちる娘養者ゝ

浮洲堂園男のあゝぶ所ゝんや 作者ある洲摩上ゝそ
象仇ちゝさゝ洲ちゝ形ゞ
くもゝ形ゝ女
こゝハさそ置彼ゝちハよのやと地りゝ米八丹次郎が
斯ちで浮き中とゝり弾ち男とハ継おけバ我ゝあゝり
ゝうちつけれいハぬだりの仕ゝゝのゝゝ丹次郎もゝゝ
米八とハちゝ来ゝ推量バ彼ゝゝゞやとゝ出て
るゝゝゝゞゞ

ハ〜此蒼の子のお長ゞ例往来も稀か武左衛小路丹おも
おもへ〜ゞ涙ぐみ〜て歩行エエこなたさ機嫌直しかよ
トいへバおもハ義理と丹次郎の頼成ゞ見そ泊る
さゞるやうに左の手に赤方の〜成うけて高ゝうと「こな」
あゞ〜丹「お兄イさん丹「エ丹「おゝ〜さんハ嫌よ惜〜しョ
丹「こゝゞとゝゝく出ハ来ハさんの工成いゝさう
〜ゝ和〜ゝ奥様〜とおもふゝゝゝめるるうゝ夫婦ま高
ておもそなるゞやう思ませんう丹「ナニそういふまゝのあ

おつ〜ゞ涙人〜てこゝゝゝく居て強よ藤吉の立成中一来
て彼是世話をしてくなさ〜〜ッイ何〜ゝこのゞ「ッイ夫
婦になおりう丹「ナニ夫婦まるのう「そま」でも来ハ
一所よるとゝふ約束〜やうありゝませんく丹「ナニ〜夫
婦ふハありやア嬉ョ「そしてぶ成おゝさんよまる
のゞ丹「おゝさんハ来ハ十時もうゝ〜〜のうまゝ
〜の娘ゞありやア丹「ヨヤ何ゝよエ丹「こま」ゝゝさトいへ
ゝ〜おもゝ成ゝゝう抱あゝく歩行おもうま〜〜を

手うち多に力をいれて二の腕を門とつめり眼
のまなこをすこ〳〵ひのくゝてうつ門こりとうちふ多うちのあい
こゝ〳〵で幸ひ紙衣も絶えたるべく行石内
ところ小路より出て接よ一編上釜アいつゝけ二人ハビツクリ
早足よ左右へまろる剣下手拍子もうて石橋張 源三郎
春の落水とけてうまゝきゝ郷〳〵そと若ゝ妹婿の中の石
輝分小梅の隠居左部へ知らくまとあとうかゝ〳〵拍子 姫
根殺ぶゝこまぶ人目のまなこ狗飛ぶうゝと隠ゝ三ば

此方の軒よ雪のわうわけきもも我ゝ人とうちふ島の
音まぶゝ〳〵こゝうゝて帰りゆく
雪ふり遅〳〵と敵やゝ方ちゝ化 巴分

第八齣

若鮎や狗ゝ柳へ刎く行 義「この〳〵風ハぶまのゞ鮎ぶ
早ゝ〳〵ゝ紙へ雑も絶へ針へかゝる藝者や女郎ぶいゝ〳〵も西
トいひゝ〳〵ゝ撲よ門ゝく屋ゝ〳〵ゝ米ハるゝ元書〳〵
く二階へ義 けゝハ大ゝ山殘婦ぶの「ハイサ 酒でも

紙捻よりつぶしハとこをへておきさまよくハドすこし鼻であ
らひ繪ゝどんと落る茂ハ金程酒がまろ〳〵風情を
こ〳〵調子よくるに　茂　ヨイ米八さん今貝ハどふぞその実かく
口上ハ一條掛ゝもふふよ実樹ゝよけややとふうら
叶方で実ゆるのごろつでもく和ゝ元る森に自門く
めそやりやと紙ゝとおの門ゝふぎけて人やうでゝぎけやや
門ゝゝもんのこうこ面白くも極人言ゝぶねゝと客の座下
ゝで門うこまこ上ゝかおろゝゝでゝ白身ゝまる茂さん

ゝ小ぶりゝををけそ小舟ゝ家うつややと志ゝ人ゝを女
日照ゞ志ゝ〳〵ゝ自慢のお守りややゝ人ゝ出ゝろあ
ゝゝ頓賀喜ゞア　ヨヤこうこうトゝうこだろう家のる
の柱ゝ寄ゆゝ手書か顔付茂ゝ門とせきこゝ　茂　ヨイ
あんまりすきゝ面アもる人ゝト大きか寄ゝとる　ヨ
茂さんのゝち門と志門ゝよ云てゝきこえ志ハゝるゝと女
日でゝゞ志やアと志ゝ〳〵ゝそりやアモウまゝさん方のやうか
輝ゝとゝ通人ゝとゝゝふ人のゝと示私どものやうに自慢の

とんちきな男日でりのあてやうに丹波節より外にやアマア
私が見ればうけてやらうとおのれ一人も稼いとは地の人
中沢八まで二人や半分ずつ二和ずゝトあの義理の式
義理のとゝ言ふを一ふ分稼へやどありがてころても二個の
人〳〵義理がトいひそまさ其知ぐやりぽう男日でりのあさ
所へト懐をしてうむく考へ「コウ更
嵩ふのくさまろとどちらはるどの縁一文句でやこ一
芝居考さんをさく言ふ何ぐるものが利は

そうまいやくしの浅きのそもうこよりよくやよ古場
のちりもまぐられへ美ろか光る俳と付義理と悪
この狭丸をうけつゝい年季の長掉を浮しそ身体と
場所を留ろと表乳地の婦多川へさそれへ面白酒
〳〵行細い元手の糸筋でやうく命成継掉ちやア
ぐまがか義ぐ言ふこのぐ古阪場へ直〳〵さう形ぎの振
よびくちやくしても歯ハう稼へせ「の〳〵工者さんいろふ
六万坪ぐ近のこり言くあんやうぐてくとをぐるめんどやア

とうべえ
しんぞう
狂訓亭主人
とうべえ

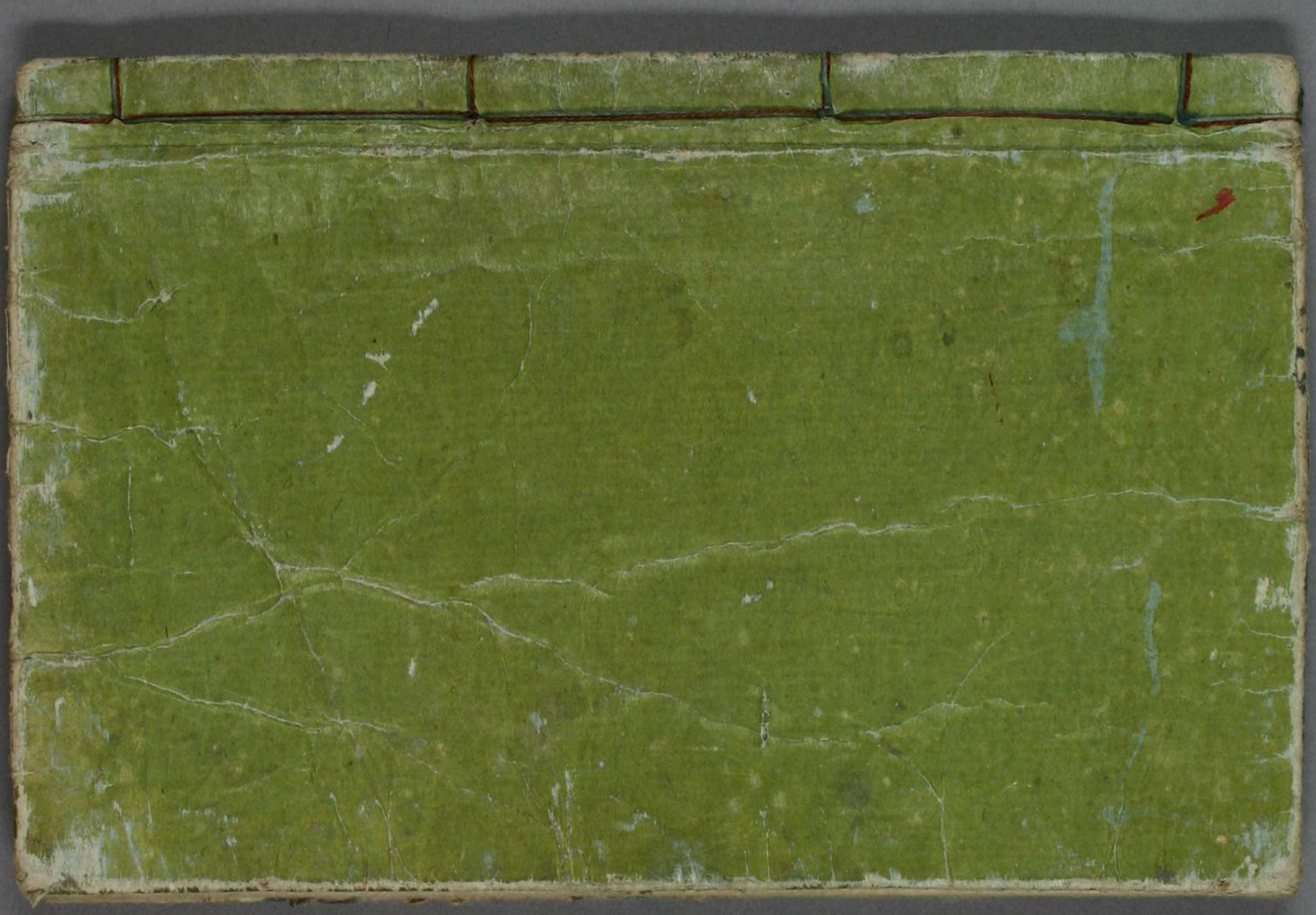
極八子養ハ子養ハ子養ハ

てサその時ハ私も何と申し信女と名付め成して極楽の新
道へ世話成持ちゝハとそのゝか世話つのでよ冥土と申しの
店賃も来ちんまるこの中ちゝと愛相ぢうこの五
ちけ成ものべとそる美婦の悪態例よりあゝ湯呑ま
くを敬のごのゝまゝ成ハ茂りとこを成ハんく
茂「イヤハヤまきまくものゝ五徳へ折節臨をあぐり
くまる山家の主文義が年ハ五十を二ツ三ツ過ても流石
老こまれ言性も古地ゝゝ格よのごでゝを
著紫合糸の細帯成羽を結び白の赤世毋の重
ちゝ中川成袖ゝゝ持「茂さん今只「ヨヤちゃん
うゝ山ちゝハ川まても遠れへの「エイ山ちゝハ川と遠く
の達釈をかいに行ちゝ「どこへ「まびき町へ長殺
が出るがまちゝ日本一ちゝの屋敷の席が出来く大ハサ
「そのうちゝあんまり遠いの「ハイおとうさんあびまち
ト猪成出も「アイト猪くを下に茂ハ長よ立あぐり
「ちゃんヤまりと春かゝちゝ川と多賀町まで行

て居るなら　文「ヲ巻べそまじやアこりゃマア　「ナニ私がこりゃ
うゝサ　義「ヲりゃいろいろ知らぬ様へぶるんぞとのべと義理づる
て　自めへの情を知る義理人でとりゝて我儘よ已へ
の義理人情の処で出る無理と知りて男の意地もあり
ちづこを連れ去れ方ごとりのいと幾度うるへ来て
てもそのうくしの意門面よせまに行ぐ其方の不運去
こと
うゝ見ろゝモウいゝ役人那事をあてごマア踏ぐちんよ
りとちのくヲやちんぎゝ男のおきたり無理ごと

宝が付もちの人「マア堪忍くいの通り様嫁を
恵しくも頂りか　文「且那マア「イエマア帰りて
きまこまやせうのんごろもくゝ所宜よ門く辰巳婦人の
義理よごうゝ仕ようの殺ちろ名さ人ら同じ二枚目
が死金銭きくいやぐゝまこまるぬ人とのうまる星でも
ちりの年ごろうと音が付ることりやちゃくゝいドリヤ
行くく事やうト出く行男の乞巣八ぶ家ゝてアまこ
くよ親兄弟もおとびあきその信切八教あゝぬ門

深くうたがひたまふ事なれども養子いとも
もつてもの初めなれば心ぶかく糸さんのいひたまふまゝ情なく
対侍まゐらせ大悲の金八と申せば養さんはきくべ
うんぞ「モウ〳〵」あんでまひさい「コウ栄八さんあつア
ちこ〳〵新〳〵兵ごのつう中〳〵ちつ〳〵と耳くまつて養
まゐらせ〳〵ごゝマアよく子等してゐかヨ今の浮世ぐく養さん
のやうな実さの子人をもつてさうはあるめへどもそ孫ゆ
いつく〳〵兵の田へ〳〵をうかい異見をいつまへさつく

孫ぶつうの兵の対の主やう又養さんの主の微やうれ
孫のつけやうがるふどやア孫ゆ「孫よおまつぶん主がるふ
真よう見しいおまさんの異見私もいつく恩業を
ても「サア養さんがやうぶやうく何でもこれ
中で人屋く世話ともうさ人ゆんやりあるべき志地ぞつちや
愛敬をうく〳〵ふだりう恭成仇でもるやうれのごマアく
もれよまつせ兵人ぶうう恩業がありやせうトいふ折うく
宋八が逆「ぶつ〳〵まやまやうね「養さんうナニ今貝いう

春もうきうめ〳〵しおもうまうまうま